

追悼 二村文人先生

去る六月十一日、人文学部教授二村文人先生が脑梗塞により急逝された。その前日、先生は、大学の勤めを終え、奥様と聾盲の咄家の落語を聞きながら夕食の時間をくつろいで過ごされていた折に意識をなくし、緊急入院されたのであったが、治療の甲斐無く十一日夕刻にご逝去となられた。満六十一歳であった。葬儀は、先生生前のご意向もあり、ご家族のみによって執り行われた。

二村先生は、平成三年四月本学教養部に文学担当助教授として赴任された後、同五年教養部廃止に伴い人文学部日本東洋言語文化講座(現在の東アジア言語文化講座)に移籍し、同九年九月の教授昇任を挟み、日本文学の分野で教育と研究に力を尽くされ、また社会貢献活動に鋭意従事された。

主な研究課題は、落語・講談を中心とした舌耕文学、及び式目を中心とした俳諧(連歌)の究明であった。

授業は、ご専門の近世文学や近代の短歌・俳句を担当し、幅広い学識と持ち前の感性をもって講義・演習等を興深く進められていた。時に俳句の実作などを学生に課し、句作の魅力に目覚めて自らの新たな可能性を発見する者も少なくなかった。学生一人一人の学修・生活面への配慮にも細やかなものがあった。

学部組織の運営面では東アジア言語文化講座選出各種委員会の委員のほか、講座代表者、入試委員会委員長などを歴任して、講座・委員会を纏められ、



故 二村 文人 先生

平成二十五年四月には副学部長に就任されて、以来学部長を輔け、特に将来構想の策定に心を砕かれるなど学部の運営に尽瘁された。

二村先生のご研究はそのまま先生の趣味とも繋がるものでもあった。

先生は落語・講談を楽しんでその情

緒を愛し、また地域の連句の会を取り持ち、歌舞伎・文楽を見に東京などへ行かれて、亡くなる前も次回の興行を心待ちにされていた。先生がその生を完結されるお姿は、先生ならではの粋(いき)を示すものであったといえる。「いつもポケットに文庫本を」とは、日本文学文化研究室が発行する『国文草子』に今春寄せられた学生への一言である。好きな「文庫本」をポケットにした青年が壮年・初老を生きて見せた一つの姿が、江戸情緒を体現した先生のそれであった。

二村先生は、先生と接した人に親近の連帯感を抱かせる希有な魅力の持ち主であった。それは生来の温厚さとそれを保ってきた心の鍛錬による。その温厚は、組織の成員それぞれの思い・意見を鷹揚に受け止め包容力をもって全体を調和させるところに表れていた。そんな先生を失った空虚感には堪えがたい。

宮沢賢治は『銀河鉄道の夜』の中で、カムパネルラという少年が、そのおこなった心優しい利他の行為のゆえに、親友ジョバンニの目の前で銀河のホームに降り立つ姿を描いている。ために、以後ジョバンニと行を共にすることができなくなった。残されたジョバンニは一人現実に立ち戻り所与の命を生きねばならない。

今、私たち人文学部教職員は、二村先生という、学識豊かで風韻を備えた、寛やかな心の持ち主を失って途方に暮れ、悲しみの中にある。しかしそうでありつつも、先生があたかも一編の詩のようなすずやかな生を完結させたお姿に深甚の敬意を抱き、先生と共にこの学部で過ごせた幸せを噛みしめている。

二村先生は遙かな国の人になられたが、先生の豊かな人間性と出会えたこととの感動を胸底に留める限り、残された者それぞれにとって先生の死はないものと信ずる。満腔の感謝の思いを添えて、謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げますのである。

東アジア言語文化講座代表 教授(日本文学担当) 呉羽 長すずむ